

第2回県土整備政策会議 会議録

1 日時 令和4年1月31日（月）午後1時30分から午後4時30分まで

2 場所 県議会議事堂 執行部控室（議事堂5階）

3 出席者

（委員） ※別紙委員名簿のとおり

（県土整備部）県土整備部理事、公共事業運営課長、都市政策課長、
住宅政策課長 他

4 議題と委員意見の概要

下記の議題について担当課長からプレゼンを行い、各委員からご意見・ご提案をいただきました。

（1）担い手確保に向けた戦略的な取組（入職・定着の支援）

【質問】

（酒井委員）

資料P4の若年就業者の主な離職理由に「自分がやりたい仕事とは異なる内容だった。（ミスマッチ）」とあるがどういう点だったか伺いたい。

（向井田課長）

インターンシップ等があるこの会社はどのような仕事をしているのかわかるが、そういった経験がないまま入った場合に、入る前とのイメージと仕事内容が違っていたというようなミスマッチが多いと思われる。

（酒井委員）

思っている以上に仕事が大変だった、あるいは責任がありすぎてしんどいとか、会社の中で若い人がいないであるとかミスマッチの理由がわかればと思っている。

（向井田課長）

やはり仕事の大変さや入ってみたら仕事内容等が思っていた内容と違っていたというところのミスマッチが多いと認識している。

（斎藤委員）

資料P3の「建設業の高卒就業者の約5割が3年以内に離職」とあるが、他業界あるいは同じ業界の別会社へ流出しているのか。

（向井田課長）

技術系の職員は、同じような業種と違った職場環境へ流れているのではないかと考えている。

【委員意見】

（清水委員）

四日市市で建設会社を営んでおり、ど真ん中の議題である。質問にあった若年層の技術者の離職は、ほぼ他業界への再就職が多いという感覚である。三重県の実践の中で行われている出前授業、インターンシップ、現場見学会、写真展の開催等も自社も企画したり協力させていただいている中で感じていることを4点ほど述べさせていただく。

まず1点目、インターンシップについては、教えられるものや感じてもらえるものは時間の制約から限られている。特に学生にけがをさせてはいけないので、すべてを体験してもらうことは非常に難しい。そのうえで、各社それぞれにインターンシップ用の見せ方をしている部分があり、それが実際入ってみると全然違うところと繋がっているかもしれないと感じている。インターンシップに取り組む会社は多いが、会社毎に取組が違う。少し踏み込んでインターンシップでこんなことを経験させてあげて欲しいといったことを指示するのもありかと考えている。例えば、なるべく実務にあって、一日のサイクルがわかるように業務を体験させてほしいなどである。

2点目、冊子の作成については、出前授業の中でアンケートを実施しているが、メリット・デメリット、ワークライフバランスや自分がこの仕事をできるのか、通じるのかといった自分への不安の内容がすごく多い。世代の問題なのか、業界の問題なのかわからないが、チャレンジできることに対しての不安を取り除くような内容があると非常にいいと思う。

今後の取組について2点、まず一つ目が連携の拡大です。近い世代や若い世代とのコミュニケーションをもっと押し込んだ方がよい。交流会や説明会については、年配層や会社のトップが行くことも大事であるが、OBや年齢の近いメンバーとのコミュニケーションを取るとすごく効果があるのではないかと思う。

写真展については、別団体でも約10年前から写真展を開催し現在も続いているものもあるが、やはり建設業界単品では見に来てくれないため効果が疑問である。ついでに、何かと合わせてできるような企画を検討する必要があると考えている。

（酒井委員）

公共事業、建設業というのは、日本の国土を守る上で必須であり、ここがだめになると問題が出てくる。一時、コンクリートから人へということで公共事業が悪のように扱われていた時代があったが、現在は国土強靱化の中で、如何に国を強くしていくか、そのベースにあるインフラ整備や維持管理を含めた公共事業が重要だという国民のコンセンサスが得られつつあると思う。少し前は、公共事

業はやらなくて良いという方向であったが、今は進める方針にあると思うので、このきっかけをうまく使い、後継者を育てていくのは大変重要なことである。

これまで土木は3Kの象徴であったが、実際にはそんなことは絶対ない。それを誰もが理解していないので、実際に現場を見てもらうことはすごく重要である。若者に現場を見てもらうのはいい取組である。その上で、どのように社会に役立つのか、活用されているのか、どんなやりがいがあるのかといった生の声を若者に発信してもらえば、土木の仕事をいいなと思う人が出てくると思う。私も昔は土木をずっと肩身の狭い思いでやってきて、自信を持って言えなかったが、今は是非とも自信を持って頂きたい。

若者は、きっちりと休暇が取れることが重要である。公共事業は、タイトな工期が多いため、土日も出勤しなければならないこともあり、思い通りに休暇を取れない。三重県もそこを考え、もう少し自由度のある発注形態があっても良いのではないかと思う。

若者を引き寄せたいのは、他業種も同じである。他業種の取組をみて建設業の位置づけを考えながら、若者を増やしていったらどうかと考えている。中間層の年齢が少ないため、若者が相談できる人が少ないのではないかと思う。

資料P20に記載されているキャリアアップを見ると、ものすごく先が長いと感じる。確かに土木のスキルは短期間でつけられるものではなく、15年とか20年ベースで考える必要があるが、若者にとってもう少し早くキャリアアップができるようなシステムがあってもいいのかなと思う。

(斎藤委員)

たくさん取組をしているが、入り口の取組が多い印象がある。やはり離職率の高さが気になる。「建設業の高卒就業者の約5割が3年以内に離職」というのは、すごく離職率が高い。一度は興味を持った人が、なぜ離職してしまうのか分析したほうが良い。企業の取組だけではなく、行政もサポートできることもあるかもしれない。なぜこんなにやめてしまうのかをもう少し詳しく知りたかった。

(川瀬委員)

私は普通科の高校出身であり、建設業は3Kのイメージがあった。建設業はそうではないことを出前授業等でもっと伝える必要があると感じた。PR資料には、若い人の声やメリット・デメリットの記載があると良いと思う。

(杉村委員)

高卒就業者向けの取組が多いので、大学進学(普通科)向けの取組ももっと必要であると思う。久居農林高校で教育実習へ行った際に、生徒が就職を考えるの

が3年生になってギリギリのタイミングであることが多いと感じた。高校生が社会へでの認識が甘いため、学校全体で意識付けを行う必要性を感じた。就職ガイダンスでは、ベテランや上層部の職員からの説明が多いため、年齢が近い身近な若手の話を聞いたほうが高校生にとって良い機会であると感じた。

(坪井委員)

東紀州地域は産業が少なく、若者は地元で生活していくためにはどうしたらいいのかと悩んでいるのが現状である。公共事業はどの地域でもあるので、公共事業関連であれば働けると考えている人が多いが、東紀州で公共事業が減少すれば、地元へ帰りたいたと思っても働き口がないので考えることもできない状況である。

建設業は3Kという考えは昔の話であり、給料が多くもらえるといった話も聞くが、将来性に問題がある。斎藤委員が言ったように、離職理由をしっかりと分析しないとターゲットもわからないため、しっかりと把握してもらったほうがいいのではないか。

(安岡委員)

高校生を中心に考えた場合、学校の先生や親の古いイメージから受ける影響が大きいと考えられるため、先生や保護者の理解を促す取組も必要である。その理解が高まれば良い方向へ行くのではないかと考えられる。

離職後の再就職先が同業種であれば良いが、他業種へ流れていってはいけない。IT業界は転職を繰り返しながらスキルアップしていくことが多い。また別の業種ではあるが、学卒者の定期採用によって世代間のつながりが強いく離職は少ない傾向がある。若手との繋がりを重視し、年齢層が途切れないようにしていく必要がある。

建設業で、インスタ映えは難しいかもしれないが、見たいと思える情報が必要である。とりあえず関心が高まるのではないか。

若者の選択肢に、休暇制度が大きく影響している。工期や天気に左右させることもあるが、計画的に休暇を取得できる環境が重要となる。

(山崎委員)

私は、防災県土企業常任委員会の委員長もさせていただいており、県議会議員になる以前は、建設業を営んでいた経験から新入社員は5月の連休に友達と集まった時に休暇取得や給料、残業の有無といった仕事の話をして最後には建設業はきついといった結論となることが多い。離職して他業種へ再就職するのは友達の話聞いた影響が多い。対策として、年齢の近い若手同士でチームを

組むことや土日出勤し休日手当が欲しいか、休みたいか希望を聞いて意見を尊重するようにしていた。若い世代は、基本土日が休みとなるようにシフトを組み、若手を大切にしていた。現状、すべての経営者がそこまで働き方改革に取り組んでいないので離職が多いと考えられる。

【意見交換】

(向井田課長)

いろいろなご意見ありがとうございました。

先ほど話のあった離職の原因について、ミスマッチの他にも、休日・休暇・労働時間の条件が悪いことや賃金の条件が良くなかった、あるいはキャリアアップするためなどが離職の原因となっている。

ミスマッチへの取組は先ほど説明したが、休日が確保できていないことについても大きな要因となっているので、県としても休日を確保するため、段階的に週休2日制工事の対象を拡大し、労働環境の改善に取り組んでいる。

委員のみなさまの意見を参考に取組を進めていきたい。また、冊子を充実させるために、どのような内容を記載すれば見てもらえるようになるのか、みなさまのアイデアを頂きたい。

(酒井委員)

ネットやYouTubeでの動画配信を検討してはどうか。

ほとんどの若者は冊子を渡されても見ないと思う。スマホでちょっと調べて確認することが多いので1、2分程度の短い動画にして、ネット上で流せば見てくれる人もいるのではないかと思う。冊子の中身をぱっと見れるようなイメージ、若い人はスマホしかみないと思う。

(清水委員)

先ほど意見のあったYouTubeだが、三重県建設業協会が昨年ぐらいからYouTubeチャンネルを立ち上げている。施工事例等をあげているので、コラボレーションできればとても良い取組になると思う。

(川瀬委員)

YouTubeであればやはり1、2分程度の短い動画の方が見る側としてわかりやすいと思う。高校生や大学生をターゲットにするのであれば、難しい専門用語を使わずに簡単な説明とし、実際に働いている人の話もあれば良いと思う。

(向井田課長)

委員のみなさまの意見を参考に見せ方などを工夫し、取組を進めていきたいと思う。

(2)「これからの都市公園のあり方」について ～ポストコロナ時代を踏まえて～

【質問】

(酒井委員)

維持管理で大変ポイントになると思うが、経費的にはどれくらいかかっているか。このまま続けるのではなく、新しい方向性をどう考えるかという話だと私は思っているが。

(林課長)

6公園で約2億5千万円。1公園当たり4千万～5千万円程度の管理費がかかっている。例えば鈴鹿青少年の森では、4千万円のうち半分が芝生・樹木管理、園内トイレ等の清掃費用、残りは電気代や点検の委託費用となっている。大きな修繕は老朽化計画に基づいて計画的に実施している。

将来的な大きな方向性としては、鈴鹿で取り組んでいる Park-PFI(民間提案)で維持経費を削減するというやり方を県内に広げていきたいという思いがある。

(安岡委員)

にぎわいを測る指標は、現在、利用者数と書いていただいているが、それ以外にも何か計測している指標はあるのか。

(林課長)

現在は利用者数が唯一の指標となっている。

【委員意見】

(山崎委員)

私は四日市の住民であるので、北勢中央公園の件でお話をさせていただきたい。

北勢中央公園は、老朽化で遊具等も魅力のない遊具にだんだん変わっていつている。時代の背景上、出来た時は、みんなこぞって楽しむスペースができたということで、私も、20年、25年ぐらい前は、子どもを連れて行っていた。でも、今見ると、遊具も老朽化、陳腐化して、子どもたちがここで本当に楽しんで遊べる場所になっているのかなあと、ちょっと空間的には違うなという感じがする。

また、池があつて水辺に展望台みたいなのところもあつて綺麗な場所であつたのが、そこも時間が経つと、見るものに値しないものになつてきたなと思う。都市公園というのは、行ってみて楽しくなるといふ思いがなければ、行かないし、そこに行けば何かになつていふ思いが、皆さんの地域の方達が思えば、絶対に集まってくる場所になつていふことだと思う。

魅力あるといふところで言うと、今なら四日市中央緑地公園がある。Park-PFIによって、スタバができて、ピザ屋さんができて、もう1件出来ており、飲食

関係が整備された。

しかし、これらができたから、ここが流行っているのではない。見た感じのイメージがすごくおしゃれで先進的で、さらに、近代的な総合体育館ができて、そして、人工芝のサッカー競技場、ラグビー競技場がずっと3面続いて、そして、陸上トラックと併用しながらもサッカーとラグビーがまたできるという施設と、本当に、行ってみたいなという施設の場所が変わった。

そこで行われているのは、ウォーキング。ウォーキングをして、一生懸命健康のために来ている方、それから、ランニング。競技をされる方が練習をされたり、また、様々な健康のために走られたりという方がたくさん、朝から晩まで、いらっしゃる。

そういう楽しみが、「何だかあそこに行くと気持ち良いよね」というその思いがあつての都市公園だと思うので、その辺の整備を、時代背景にあわせて中で、民間の活力を生かして、それぞれの都市公園の機能を生かしながらも民間の活力を投資して変えていくことで、にぎわいの公園に変えていけばいいのではないかと思う。

(安岡委員)

先ほど確認したが、指標は人数ということなので、それをベースにお話したい。

健康維持という取組もお話に出たかと思うが、健康維持に貢献するために公園を利用するのは結構ニーズはあるのかなと思う。それを踏まえて、いかに健康な方が増えたかということや、病気になる方が減ったかなど、そういうところまで数字を広げていくことができれば、公園の存在意義を強調できるのかなと思う。恐らくすぐにつなげて出せる数字ではないと思うが、そういう視点で評価できると公園の価値をより認識してもらえるのかなと思う。

一方で、にぎわいを作っていこうと、また先ほど鈴鹿の事例とかあったと思うが、にぎわいづくりを行ってみて何か面白いことやっている場所だなんていうイメージが定着すれば、とりあえず行ってみようということに繋がると思う。そこで民間側として稼げれば運営費用や、今後の投資に回せるという現実もあると思う。にぎわいを創出しつつというのは非常に今後のキーワードなのかなと思っている。ちょっと残念なのは、どの公園もどんどん規制が増えていて、私も団地に住んでいるが、団地内の公園でもあれは駄目これも駄目って出来ないことが多い。本当に小さな子どもさんが、よちよちと歩くぐらいなら全然問題ないが、ちょっと元気な子どもが何かしようと思うと、すぐに苦情に繋がるとかというイメージがすごく強い。何か冒険的にある程度自由度を高くしてもらえると、「あそこはなんかいろんな事できる」というイメージにも繋がるのかなと思う。特に日本はそうかもしれないが、いろんな規制がすごく多いと思う。あれ

は駄目これも駄目路線よりも、ちょっとチャレンジをさせられる機会を与えるような方向性を一度考えていただければと思う。

(坪井委員)

私は東紀州地域の住民なので、こういった都市公園も、熊野灘臨海公園挙げてもらっているが、都市公園があるっていうイメージが全く掴めていない。

皆さんがお話している内容が非常にうらやましく思っている。

熊野灘臨海公園は、オートキャンプ場があり、今ホテル季の座として、プールにすべり台があって、子どもが小さいころはそこでよく遊ばせていて、非常に助かったが、ただ地の利が悪く、車がないといけないようなところ。

個人的な意見だが、高齢化が進んでいるので、免許証の返納をしなければならないような年齢の方が非常に増えてきている。そういった方が、自転車なり徒歩なり、また交通の便のいいところにこういった公園を作っていただけると非常にありがたいと思う。

今、コロナの関係で、公民館サークル、老人の方がたくさん集まるようなサークルが全部中止の状態になっている。そうすると皆さん外に出ることができなくて、家の中、テレビがお友達という高齢者が非常に多い。何かしら体に異変が起きてしまったりとか、独居老人で、今元気なのかどうなのかもわからないような、そういった感じになっているので、そういう公民館サークルを公園でやれば、また皆さん外に出て、お友達と会話ができてっていうふうにも繋がるのではないかと考える。

私の希望だが、尾鷲市に中部電力の跡地の広大な土地があるが、そこにこういう都市公園を作っていただければと、尾鷲市のふれあいバスであったり、三重交通さんの関係であったり、都心部っていうわけじゃないが、市街地に近いので、老人の方も自転車なり徒歩なりバスなりを使っていくことができる。

尾鷲市は魚釣りが有名で、磯釣り大会であったり、様々なことやっているが、そのようなアウトドア的な遊びもできるし、敷地が非常に広大なので、野球場、サッカー場、バスケットボール場なんでもつくれる。コテージもつくれる。ただ、海に近くて津波が心配というのが難点なところではあるが、非常にお勧めしたい場所である。

尾鷲市も中電跡地に何をどう作っていくかということ、様々な会を通じて考えているが、まだ決まっていないような状況。

また、休日になると県内外から尾鷲の港に魚釣りに来てくれる方が多い。それも親子連れで来てくれる。そういったところを生かして、上手に尾鷲市を活用してくれたらと、私個人的には思っている。よろしく願いたい。

(杉浦委員)

自分は若者の意見として言わせてもらおうと、まず 17 ページで、「幅広い世代のニーズへのきめ細かな対応が必要」と、あったと思うが、ニーズに合わせた住み分けというのは、必要なのかなと思っていて、多くの高齢者が静かに過ごしたいと思っている反面、若者、中学生や高校生というのは、やはり運動したり、ちょっと大きい声で騒ぎたいという気持ちがあったりして、今、コロナが流行っている中で、学校自体でもマスクをして黙食をして、しゃべるなど言われたりしている中で、すごいストレスがかかっている状態。

それを広い公園で、大きい声を出すことができれば、中高生も公園に来て遊びたいとか、運動したいという気持ちになるのかなと思った。

その関連で、25 ページにスケートボードコートがあるが、人気になってきたスケボーや、ストリートバスケなどのコートを置くと、中高生がバスケしたいと思っても、道路ではできないし、体育館へ行くとしても、やっていない時間帯もあるので、「ストリートバスケなら公園にあるので行こうぜ」という感じになるのではと思った。

あとは、ファミリー層に向けては、休める場所がもう少し欲しいかなと思っていて。小さい子どもがいると休む時間というのにも必要になってきて、そのためにリュック背負って敷物持ってさあ行こうという感じで、準備すると思うが、そうではなくてベンチや椅子があれば、ちょっと休める場所というのできるの、そういうものが多くあると公園に来やすくなると思った。

あとは、坪井委員も言われていたように、三重県の公園がある場所は車で行かなきゃいけないというところが多いと思う。そうになると、自転車や徒歩しか交通手段がない中高生が行きにくい。バスやタクシーなどを手配できるようにすると多くの若者が来るのではないかと思った。

(川瀬委員)

公園の役割として、健康の維持のために、運動や遊びをしに行く思いが強いので、子どもたち、老人の方の安全の配慮のためにも、維持管理はしっかりやって欲しいと思う。

資料の最後の方に AI を使ってリアルタイムで混雑状況がわかるみたいなこともあったので、コロナで密になるところは、行きたくないと思うことがあるので、そういう取組も、もっとやって欲しいと思う。

私の家の近くに、北勢中央公園があるが、記憶の中で私は行ったことがない。

私としてはあまり魅力を感じないというか、行ってもすることがないみたいなイメージがあるので、行ってみたいと思うような、「何か」が欲しいと思う。

(齋藤委員)

いろいろ意見が出ていたが、個人的には、小学生の子どもが2人愛知県にいる。公園は、大きく分けて2種類あると思っている。近所であって、歩いて行ける小さい公園と、大きい公園。県営都市公園は、その大きい公園にあたると思うが、そこに先ほどの意見もあったが、「何か」がないと多分いけないと思う。

ここ10年ぐらい岐阜県と愛知県に勤務したことがあり、住んでいたことがある。にぎわっていたなあという公園もいくつかあり、そこには何かひきつけるものが、子育て世代であれば子どもを遊ばせる場所といったものがあつたと思う。

岐阜県の海津に国営の木曾三川公園で、ものすごい大きい遊具が、アスレチックのような遊具があり、1日そこで子どもと一緒に遊んだり、ちょっと疲れたら、親は休んだりみたいな感じのことができる公園があつた。

やはり何かないといけないのだろうなという感想を持っている。

三重県には、都市公園が6つあって、ターゲットはそれぞれ違っていて、それぞれの目的がある中で、なかなか熊野灘臨海公園だと、坪井委員もおっしゃっていたように、地元の方々がちょっと不便に感じている。外向けに大都市圏の方に来てもらうためにという、その兼ね合いがすごく難しいなと思った次第。

コロナ禍で、愛知県の公園だったが、子育て家庭として助かったなというのが、こういう大きな公園で謎解きイベントというのを、民間活力とおそらく通じる部分だと思うが、イベントをやっているときがあり、欠かさず子どもを連れて行っていた。

(酒井委員)

皆さん、お話いただいたことと同じになるところがあるが、1点は、総花的に同じものがあつても、公園に出かけていこうかという気にはならないような気がする。

私も、小さな子どもがいた頃は、行くとなるとすごく大きい遊具があるとか、何か特別なものがあれば、そこへ行って遊ぼうかなと思うが、どこでもあるものがあつても、なかなか車で行く気にはならないと思う。

コンセプトというか、ここはこれが目玉ですよというのを作っていただいて、発信していただければ、県民の皆さんが注目してくれるのかなと思っている。

そのために先ほど伺ったが、やはり維持管理というのが大変重要になってきて、遊具が壊れていて利用できないところへ行くとすごくがっかりする。そういうことが絶対ない、かつ安全でないといけないということなので、維持管理という点を県のコンセプトの中に入れて、「この施設はずっと守る」というような、考え方で動かしていただければと思う。壊れたらそのままほったらかしの施設は作らないで欲しいと思う。

それと、今の時代広いところで、3密を避けた状態で、外で仕事をするという発想が出てくると、公園にWi-Fiがないと駄目だと思う。Wi-Fiの設置というのは、日本の国全体で遅れているところもあるが、県が率先して県内どこへ行っても繋がるか、公園だけで進める話ではないかもしれないが、そのような、次の時代を見据え、多分コロナ禍によって、リモートの時代に突然変わって、ネットがないと生きていけない時代になった中で、取り残されないように、そういう考え方も取り入れた公園の運営を考えていただきたい。

あと、民間のノウハウを取り入れることは、大変重要だと思う。それによって新しい発想も出てくる。この資料を見て、「30年間で老朽化しますよ」という発想自体が私は違うと思うので、施設が30年もつとは到底思えないので、民間の発想を取り入れて少なくとも、5年10年で考えていくような発想になった方がいいのかなと思う。

(清水委員)

まず、様々な公園でいろいろなイベントがされていると思ったのがこの資料を見た時の感想であった。何か目玉があるような公園であれば、それを目的に行くが、イベントごとで自由に使えるような場所については、当日の発信がとても大事だと思う。そのような情報を、例えば私は四日市に住んでいるが、グルメなら何か食べたいものがあると、インスタなどに「グルメ」と検索で打つと山ほど情報が出てくる。

しかし、「当日何がやっているのか」というような情報は、友人のフェイスブックやインスタグラムから流れてくる情報から知ることが多い。例えば、県民や市民が「こういうイベントでこんなことをたくさんやっている」という情報がパッとわかるような発信がSNSを通じてあるとすごくいいのになあと思った。

また、にぎわいも先ほど皆さんがおっしゃられたとおりで、どういうにぎわいを作るのかや、誰をターゲットにするのかで全然違うと思う。

最近よく同世代で聞くのが、ペットを放して遊べるところが結構少ない。街中に新たにドッグランを作るのもいいのかなという話を別の会議でもした。ペット関係にターゲットを絞るなどしても面白いかなと思った。

あと一つ、花壇の整備や掃除について、こういうのを教育と連携して小学校や中学校の課外授業で、掃除したり整備したりというのにちょっと手を加え、何か参加してもらうのはどうかなと思っている。

例えば、小さな子であればシルバーさんと繋がったり、大切に公園を使うべきという社会勉強になったりというのと同時に、身近に公園を思ってもらえるというので、新たに発展していくのではないかなと、少しぼんやり思ったところ。

【意見交換】

(林課長)

様々な意見をありがとうございます。山崎委員、斎藤委員、酒井委員、清水委員から、その公園に、目玉、魅力がないと誰も行かないよと。近所の公園だったらふらっといくかわからないけど、大きな公園は、魅力がないといけないよというような話であるとか、あとは坪井委員、杉村委員からは、ニーズに応じたものにしないとそれぞれの年代等のゾーン分けも必要じゃないかとか、いろいろなご意見をいただいた。

川瀬委員からは混雑状況がわかるようなAIを駆使したり、酒井委員からも今はもうWi-Fiは普通だよとか、いろんな話をいただいた。

私が思ったのは、官民連携が大事なかと、今まで量の整備であったので、一辺倒で県が指導して、設計して絵をかいていけば、全国的に画一的なものでよかったが、これからは新たな段階へ突入し、質を高めることが必要だということで、官民連携がますます必要になってくるかなと感じている。官民連携という切り口で、何か委員の方が思うことがあれば教えていただきたい。

(山崎委員)

中央緑地公園が先ほどPFIを導入し新しくなったということをお伝えして、さらに中央緑地公園が近代的になって各施設が素晴らしくなったとお話しましたが、特にトイレの環境がすごく良くなった。子どもさんを連れてくるお母さんでも安心してトイレに入れるようなトイレに変わった。Park-PFIが導入されたことにより、ウォシュレット式のトイレになったりと綺麗になっている。運動される人も外部で、和式だったのが洋式に変わった。体育館の中は当然ながら、更に綺麗になり、ウォシュレットタイプのものばかりが設置されている。安心して、老若男女すべての方が、トイレ環境を気にしなくてもよくなった。

トイレが綺麗なところというイメージが強くて、運動するにも、散歩するにしても、遊びに行くにしても、スポーツするにしても何でもあそこだったらトイレは大丈夫っていう安心感はある。

三重県としても、トイレの部分はしっかりして、環境を整えていただくということをお願いしたい。

あとは先ほどから言われる民間の力を借りて新たな都市公園機能として、にぎわいを創出する特別なものを披露して、発信することができて、先ほど酒井委員もおっしゃったように、Wi-Fi環境で、コロナ化の時でも、青空の下で読書ができ、勉強ができたり、仕事ができたり、パソコンを使ったり、調べ物ができたりっていうことが可能になれば、さらにもっと人がにぎわう場所が変わるのではないかと思う。

(林課長)

デパート、遊園地、テーマパークでもトイレが一番というぐらい力を入れている話は聞きます。

一方、県ではどうしても見えない部分はおろそかになる。見える部分を、何か最優先でやるというところがありますので、そのあたり、これから、来年度の指定管理者の選定もあるので、何かの機会に生かせればなというふうに感じた。

(酒井委員)

トイレの件で、NEXCOがサービスエリアを民営化した際に、トイレを一番綺麗にした。そうすると、利用者の方がトイレ綺麗だからっていうのもあって、あれだけ繁盛している部分があり、結構こまめに綺麗にトイレ掃除をしている。

民間企業なのでそこにお金を出せるというところはあるが、県の施設もトイレはやはり大変重要なポイントで、今まで一番後回しにされるかもしれないが、本当は一番ポイントになるところだと思うので、ぜひともそういう意識で対応していただければと私も思う。

質問になるが、民間企業を入れるということになると、儲からないとなかなか民間に入ってもらえないと思うが、ここに挙げたようにいわゆる商業施設が入るといいが、そういうベースだけじゃなくて、施設を利用するときにお金を取るなど、県がそのような発想になってもいいのか。

(林課長)

Park-PFI もカフェとか収益施設を公園の中に、公園の利便性を高めるという大前提はありますけれども、収益施設を作って儲けていただき、その儲けたお金の一部を整備にまわしていただくというような仕組みになっているので、そういう傾向にはなっている。

(酒井委員)

公園の使用料を払う施設が入らなくなり、さっきの遊具等の話で出た維持管理のための利用料を取るわけにはいかないのであれば、県の予算としてそれを維持管理するために経費が増えるといったことは、考えられるのかということだが。

(林課長)

なかなか拡大というのは、確かに維持管理のことがあるので考えづらくて、その中で、何とか民間の企業も入っていただければと考えている。

(酒井委員)

そのような意味合いの中で民間を入れていただくということで理解した。

(林課長)

確かに酒井委員おっしゃったように儲からないと、民間は入ってこない。Park-PFI を導入する場合は、民間ニーズがどれだけあるのかという、ニーズ調査が

必要という感覚を持っている。

ありがとうございました。

(3)「困った空き家」問題について

【質問】

(酒井委員)

三重県の地理的状況を考えると、地震による津波などが予想され、住むべきではない地域も多く存在すると思うが、そのような部分も含めて議論させていただいてよいのか。

(石塚課長)

災害危険区域に建っている住宅は移転を誘導する方向である。耐震性のない危険な住宅などは空き家になり次第除却していくことも必要。利活用と両方の面の政策が必要であると考えている。

(斎藤委員)

予防的な観点で代執行をした場合、略式代執行では、特定空家等除却支援事業で補助がされるが、所有者がわかっているけど応じてもらえないものについては、補助はされないのか。

(石塚課長)

県で制度化されているのは、略式代執行で、あくまでも所有者が特定できない所有者不明の物件となっており、所有者がわかっている場合は、所有者の方に、請求することを基本としている。なお、三重県の制度は略式代執行のみであるが、他県では所有者がわかっている代執行費用に対して補助を行う制度を創設しているところもある。

(斎藤委員)

その代執行の件数は把握しているか。

(石塚課長)

法律が施行された平成 27 年以来、県内で 13 件であったと思う。そのうち 7 件は略式代執行であった。

【委員意見】

(杉村委員)

私はまだ家を所有していないので、少しわからないことも多いが、「誰が管理しているかわからない」というステージの現状の認識、どれくらいの数があるかというのを把握しておく必要があると感じた。

そのためにデータベース化や調査を、まず進め、その際に、民間に頼むのか、

行政が自ら行うのかという判断も必要であると思った。

また、空き家の利用については、移住で空き家に住んでもらうというのもよいと思うが、民間の宿泊施設や民泊の施設にするというのも、可能ではないかと思う。

先ほど発言した、データベース化の調査では「リモートセンシング」といった、空中から見つけるっていう方法もあると思うので、検討していただければと思う。

(坪井委員)

先日、よい話を小耳に挟んだので、紹介したい。

尾鷲市で須賀利という飛び地の場所があるが、そこは住民の90%ぐらいが後期高齢者で、漁業を生業にしている地域。家族が都会に行き、住んでいる人が本当に75歳以上という場所で津波が危惧されている。特に海岸付近にお住いの方の避難をどうするかということがあり、自治会の方が率先して、ここなら大丈夫であろうという、高台のところに立っている空き家の持ち主の方に、それぞれお声掛けをして、「有事のときには、ここを勝手に使わせてください。それまでは私たちがここをきちんと管理しますから」ということで、了解をいただいて、そういう取組をして、足の悪い方、高台に上がれない方に対してみんなで助け合いながら対応をしている。また、その高台の空き家へ避難するまでに「山が崩れてこの道が通れない場合は、別のこの道路を利用しよう」というようなマップも自分たちで作り、活用されている。

地域の自主防災なのか、自治会活動なのかはわからないが、このような取組を行っていることを聞いてすごいと感じた。そういった形で空き家を活用するというのも一つではないかと感じた。

また、空き家率が東紀州地域では28%もあるというのは、皆さん、お墓の移転も考えるぐらいなので、空き家になっても仕方ない部分もあるのかなと感じた。

都会へ出ていった方にもそれぞれの生活があり、空き家をつくらないというのは、自分の責任であるのは当たり前だが、余裕がないからほったらかしにしているという現状もあるので、県だけでは難しいとは思いますが、国も巻き込んで、こういった高齢化している地域を助けてもらえるような、働きかけを行っていただければと思う。

(安岡委員)

所有者の方への声掛けが一番重要であり、その唯一のチャンスが恐らく相続の時ではないかと思っている。

市役所での手続きの際、最近ではワンストップサービスで一通りの手続きを全部案内してくれるという仕組みが結構あるが、その際に住宅についても今後活用するのか、取り壊しを想定するのかを聞き取り、「こういう対応の仕方がある」という例を費用感も示しながら案内し、今後のことを考えていただくアプローチをしていくというのが一番よいのではないか。

「管理してもらわないと今後大きな問題に発展しますよ」ということを伝えていくことが地道ではあるが最も重要であり、全市町が取り組めばかなり影響力はあると思う。

このタイミングを逃すと、それ以降は広報紙や固定資産税の案内の同封などで対応していくことになると思うが、やはり直接相手方と接することのできる唯一の接点である相続手続きの時に、積極的に働きかけていただくことが大切であると思う。

(山崎委員)

様々な危険や迷惑を発生する「困った空き家」になるまでの道中で、今後、空き家の増加を抑えるということを考えていくと、私が地域で自治会長をしていた時は「世帯調査」ということで、各家庭で、何かがあったときに、「緊急に連絡をする方は誰なのか」というところも含め、個人情報ではあるが、連絡先と住所等を記載していただいていた。

この世帯調査の情報を自治会でしっかりと管理できれば、自治会長、組内さん、近隣の方がお隣の状況等を把握することができる。

例えば、いろいろな状況で高齢者になられて、お1人でお住まいで、ちょっと具合が悪くなっているというようなことをあらかじめ知ることができる。

しかしそのような体制を組んでいても、孤独死で亡くられる方もいる。そうになると、結果として「空き家状態」になってしまうが、それでも世帯調査により、緊急の連絡先がわかっているので、その方に自治会長が連絡をし、住居の管理をお願いすることができる。

草が生えたり、瓦が落ちてきたといった問題が生じた時に、連絡をして対応していただけるので、「世帯調査」の活用は、困った空き家を増やさない方策として参考にできると思う。

(清水委員)

空き家問題はほとんど(示された資料の)「ステージ0」の問題であると思う。

日本は老朽化すれば、壊して建て直すという文化があるが、その中で木造一軒家については平均的には30~40坪くらいで、解体費が100~200万円程度かかるという感覚を持っている。

空き家が増え続ける理由というのは、結局のところ、固定資産税と補助の額を比べて空き家を解体する気になれないということだと思う。

本当に「短期間に空き家率を減らしていきたい」という思いがあるのであれば、時限的に補助を多くするという手法は非常に効果があると思うし、相続のタイミングなど、判断を行わなくてはならないタイミングに、しかるべき情報があるということがとても大事なことと思うので、そのあたりの情報発信を強化していくことが、様々な手を打つよりは近道ではないかと感じている。

(酒井委員)

どのような解決策があるか難しい問題だと感じている。

三重県は行政が示したハザードマップで海岸沿いや山側は住むには適していないという地域になっている場所が多く、住むこと自体が勧められていないので、困った空き家のステージに行かざるを得ない気がしている。

そのような中、空き家を活用するといった新たな方向性を見つけるというのが本当に、適切な選択なのかということになる。

そのような意味では補助を行い、解体費用を出して更地にして周辺に迷惑かけない形にするといった発想があってもよいのではないかと思う。

空き家がある場所というのが、今後の方向性を考える上で重要なファクターになると思うので、一律に「空き家をどうするか」ではなく、空き家のある場所も踏まえ、様々な施策を考えていくことが重要であると思う。

北勢と東紀州で空き家率が違うという話があったが、東紀州地域では、当然住んでいる人が高齢化し、どんどん住めなくなってきた中で、新たな方向性を見つけるは大変難しい。公共事業も含め、南の地域に、様々な事業を展開して若い人を呼び込むといった、県全体の施策も考えていかないと、改善は難しい。

つまりは、県全体のことに関わってくることであるので、県土整備部だけの話ではなく、他の部とも連携取りながら、議論していただいたほうが良いと思う。

(斎藤委員)

酒井委員もおっしゃっていたが、「どこに空き家があるか」というのは大変重要と思っている。

アンテナが垂れ下がり、草木もぼうぼうになっている空き家があり、秋の時期にスズメバチが巣をつくった。周辺の方々が困り果てて市役所に相談したら、「スズメバチ注意」という看板をつけたというような話があった。そういう話ではないが、仮にこれを壊して更地にしてどうしようという話もあり、難しい問題であると感じた。

一般的には「空き家をこれから出さないために」という観点では、できるだけ

早い段階で、資料で示されたステージ 0 の時から可能な限り手を打つか、少なくともステージ 1 まで戻す働きかけを市町が行い、その間に利活用の方法を、市町と県で考えていく必要があるのではないかと思った。

(川瀬委員)

空き家をなくすためには住んでいる人の世帯の構成なども考慮し、1人で住んでいるのか、住んでいるのが高齢者の方なのかといったことを把握することによって、ステージ 0 の時点で、先に相続する人を確認するなどといった対策を講じることができるのではないかと感じた。

空き家の利活用としては、三重県にいずれ移住したいと思っている人もいると思うので、そのような人に提供をすることも考えられるのではないか。

三重県内で「こういうものを売りたい」というような希望をお持ちの方に空き家を売るといった活用方法もあるのではないかと感じた。

【意見交換】

(石塚課長)

ありがとうございました。

川瀬委員のご意見については、1人でお住まいになっている 65 歳以上の高齢者の方は、「空き家予備軍」と呼ばれており、これからだが市町を通じてその把握に努めていきたいと考えている。

杉村委員のおっしゃったように、ドローンにより熱感知で住んでいるかどうかを探るといった技術も進んできている。市町は空き家がどこにあるか、実は全部把握できていない状況にあり、地域ごと、どこに空き家が集まっているのかというところから対策を考えることも重要であるが、現状ではそこまで行うのは少し厳しいところがあり、今後の課題であると感じた。

坪井委員の高台の空き家活用の事例や、安岡委員の相続時の市役所での最初の案内の仕方、清水委員のおっしゃったステージ 0 や 1 における取組など、確かにこのあたりが重要であると感じており、説明の中で申し上げたとおり、市町と連絡会議を開催しているので、県内の市町での横展開が図られるように進めていきたいと考えている。

山崎委員の言われた四日市市において、委員がいらっしゃった自治会ではそのような取組をされていたと思うが、これは市全体の取組となっているのか伺いたい。

(山崎委員)

自治会組織はどこの地域でもあると思うが、加入をしている世帯だけではなく、加入していない方もわかる。そのようなことから、それぞれの組内の方は例

えば10戸中、空き家が1戸あるというようなことはわかるので、その自治会の地域全体で空き家が何戸あるかというのはすぐにわかると思う。

当然ながら、世帯調査を行い、自治会で管理をしているので、例えば高齢者で今困ってる方がいれば、「何かあったら協力しないといけない」というような話し合いも自治会ではしており、特に災害時での対応の際に、「町内のあの方は大丈夫かな」という話し合いができる。

そのような際に協力するのは自治会組織なので、空き家の数も把握でき、市としても全体を把握できるのではないかと思う。

(石塚課長)

ありがとうございました。

どうしても県の立ち位置からは、空き家対策が住民の方に身近な市町が中心になって行っていただく対策であるということもあり、実際、市町で様々な取組を行っているので、そのあたりは空き家対策連絡会議の場を通じて横展開をしていきたいと思った。

更に、二地域居住など、移住のお話もいただいたので、他部との連携等も含めて、そのような空き家の活用方法もあると思っており、そのあたりも議論を深めていきたい。何よりも「ステージ0」からの取組が重要という意見もいただいたが、やはりこれまでの県の取組としてやや啓発や広報が弱いところがあったと認識しているので、今後、その部分もしっかり力を入れていきたいと思う。

どうもありがとうございました。

第2回三重県県土整備政策会議 出席委員名簿

(五十音順・敬称略)

| 氏名 | 所属・職名 | 備考 |
|--------|-------------------|--------|
| 川瀬 恵莉香 | 三重大学生物資源学部 4年生 | |
| 斎藤 雄介 | 中日新聞三重総局記者 | |
| 酒井 俊典 | 三重大学生物資源学研究科 教授 | |
| 清水 良保 | 株式会社久志本組 代表取締役社長 | WEB 出席 |
| 杉村 桂伍 | 三重大学生物資源学部 4年生 | |
| 坪井 あづさ | 株式会社エイゼットソリューション | |
| 安岡 優 | 株式会社百五総合研究所 主任研究員 | WEB 出席 |
| 山崎 博 | 三重県議会議員 | |